『平家物語』における那須与一の人物像の形成

四重田　陽　美

はじめに

那須与一は、源平の合戦において、高名を得た武将の一人である。しかし、矢で扇を射貫く場面のみ永く語られてきたが、生没年をはじめとして殆ど知られず、その実在さえ立証できていない。本稿では、この那須与一について、『平家物語』がどのような役割としてこの人物を登場させたか、その人物像の描かれ方を考察していきたいと思う。

まず、この人物について現在わかっていることは、次の通りである。

①下野国（現在の栃木県）、那須の地に生まれた。

②「与一」（余一）の名は、「十余り一」すなわち、父にとって与一は十一男にあたる。

③『続群書類従』「那須系図」によれば、藤原北家の末裔須藤氏の一族で、那須太郎資隆（すけたか）（『平家物語』では資高と表記）の子、名は宗隆（むねたか）（『平家物語』では宗高と表記）となっている。

④墓所は、天正十八年（一五九〇年）、現在の栃木県大田原市に、那須資景が那須氏の菩提寺・玄性寺を再建し、那須氏では、これ以降、こちらを本墓としている。しかし、那須与一が亡くなったのは京都で、京都市東山区の泉涌寺手前にある、即成院（そくじょういん）という寺に納骨された。その後、兄の資之が功照院という寺を建立し、分骨を埋葬したが、この功照院が廃寺となり、玄性寺として再建されたようである。

屋島の合戦で扇を射貫くことができなければ、与一の名は歴史には残っていなかったであろう。那須太郎資隆の第十一男与一は、扇を射貫いた結果、頼朝より五カ国に荘園

（丹後国五賀荘・若狭国東宮荘・武蔵国太田荘・信濃国角豆荘・備中国後月郡荏原荘（現在の岡山県井原市西江原）を賜ったとも言われるが、『平家物語』流布の結果、那須に与一あり、と後代にまで名が残ったのである。

そこでまず第一章では、語り本系『平家物語』の代表として、『覚一本平家物語』を用いて、那須与一がどのような人物として描かれているかをまとめることとする。

第一章　『覚一本平家物語』に描かれる那須与一像

一一八四年一月、平家は一の谷の戦いで敗れ、その後は讃岐国屋島（現在の香川県高松市屋島）に陣を構え、安徳天皇のもと、内裏を造営し行事を執り行っていた。この屋島に、一一八五年二月、源義経軍が奇襲をかけた。平家は安徳天皇や国母建礼門院、二位尼らの女性たちも含めて海上へ遁れ、船戦に長けた平教経は、船の上から義経を狙う。義経の家来たちが体を張って義経を護り、奥州から義経軍の一員として従軍していた佐藤継信は、このとき義経の身代わりとなって命を落としている。戦いが膠着し、義経も今日は終わりかと馬を引こうとしたとき、海上の平家軍から一艘の小舟が水際の方に向かって漕ぎ出される。

『覚一本平家物語』巻第十一「那須与一」では、小舟は磯へ七八段（一段は一〇、九m）程で横向けになり、

舟のうちより、齢十八九ばかりなる女房の、誠に優に美しきが、柳の五衣（いつつぎぬ）に、紅の袴着て、皆紅（みなくれなる）の扇の日出だしたるを、舟のせがひにはさみ立てて、陸へむいてぞ招いたる。

（訳）船の中から年齢十八、九ぐらいの女房で、いかにも優雅で美しい女性が、柳の襲ね色の五衣の上に紅の袴を着て、紅一色の扇でまん中に金の日の丸を描いた扇を、船棚にはさんで立てて、陸へ向いて手招きをした。

突然現れた、美しい女と紅一色の扇を見て、義経は平家の意図を後藤兵衛実基に尋ねる。

「射よとにこそ候ふめれ。ただし大将軍、矢面に進んで傾城を御覽ぜば、手だれにねらうて、射落とせとのはかりごとと覚え候ふ。さも候へ、扇をば射させらるべうや候ふらん」と申す。

（訳）（実基は）「射よということでしょう。ただし義経殿が矢の前に進んで、美人を御覧になると、弓の名

手に命じて、ねらってあなたを射落とせという計略と思われます。それはそうでも、扇を射させられるのがよいのではないでしょうか」と申しあげる。

誰が射落とせるか、義経の問いに、実基は、「下野国の住人、那須太郎資高が子に、与一宗高こそ小兵で候へども、手ききで候へ」と答え、「賭け鳥なんどあらがうて、三に二は必ず射落とすもので候ふ」と説明している。

呼ばれて現れた与一は、「そのころは二十ばかりの男」で、義経が扇の真ん中を射よと言われて次のように答える。

「射おほせ候はん事は不定に候ふ。射損じ候ひなば、ながきみかたの御きずにて候ふべし。一定つかまつらんずる仁に仰せ付けらうべうや候ふらん」

（訳）「うまく射ぬくようなことができますかどうかはわかりません。もしはずしてしまいましたら、長く味方の御名に疵がつくでしょう。確実にさせていただけるような人に仰せつけられる方がいいのではないでしょうか」

関東から出た武士で義経の命に従えない者は帰れと、義経に叱られて、重ねて辞退してはいけないと思ったのか、那須与一は前に出て、海へ一段ばかり入って、八幡大菩薩を祈念して、鏑矢を放つ。頃は二月十八日、酉の刻、つまり午後六時頃。

小兵といふぢやう十二束三伏、弓は強し、浦響く程長鳴して、あやまたず扇の要際一寸ばかり置いて、ひいふつとぞ射切つたる。鏑は海へ入りければ、扇は空へぞあがりける。しばしは虚空にひらめきけるが、春風に一もみ二もみもまれて、海へさとぞ散つたりける。夕日の輝いたるに、皆紅の扇の日出だしたるが、白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬゆられければ、沖には平家ふなばたをたたいて感じたり。陸には源氏籠をたたいてどよめきけり。

（訳）与一は小柄とはいえ、矢は十二束三伏の大矢で、弓は強弓、鏑矢は浦一帯に響くほど長く鳴りわたって、間違いなく扇のかなめの際から一寸（＝三、〇三cm）ぐらい上を、ひゅっと射切った。鏑矢は海へ入ると、扇は空へ舞い上がった。しばらくは大空にひらひらめいたが、春風に一もみ二もみもまれて、海へさっと散った。夕日が輝いた中に、紅の扇で日の描かれた扇が、白い波の上に漂い、浮いたり沈んだりして

ゆらゆら揺られたので、沖では、平家が船ばたをたたいて感嘆した。陸では、源氏が箙（矢を入れる武具）をたたいてどよめいた。

夕暮れの空にひらひらと舞う、紅に金の太陽を描いた扇がやがて海に落ち、白い波にもまれる様は、その場にいなくても想像に難くない美しい場面であっただろう。八〇ｍほども離れている上に、波にもまれて上下する扇を、夕暮れの風の中よくも射きった那須与一の腕のすばらしさと、その成功の見事な場面が人々の心に残って永く語り継がれる勇姿となったのである。

ただ、『覚一本平家物語』ではこの「陸には源氏ゑびらをたたいてどよめきけり」で終わる「那須与一」の、次の章の「弓ながし」の最初の部分に、残酷とも評価されるこの後の出来事が記されている。

あまりの面白さに、感に堪へざるにやと覚しくて舟のうちより、年五十ばかりなる男の、黒革縅の鎧着て白柄の長刀持つたるが、扇立てたりける所に立つて、舞ひすましたり。伊勢三郎義盛、与一が後ろへ歩ませ寄つて、「御諚ぞ、仕れ」といひければ、今度は中差取つて打ちくはせ、よつ引いてしや頸の骨をひやうふつと射て、舟底へまつさかさまに射倒す。平家の方には音もせず。源氏の方には又箙をたたいてどよめきけり。「ああ、射たり」といふ人もあり。又「情なし」といふ者もあり。

（訳）あまりの興深さに、感にたえなかったのだろうかと思われて船の中から、五十歳ぐらいの男で、黒革縅の鎧を着て白柄の長刀を持った者が、扇を立ててあった所に立って、心を澄まして舞った。伊勢義盛は那須与一の後ろへ馬を進ませて近寄って、「君のご命令だ。あれを射申し上げよ」と言ったので、与一は、今度は中差矢を取って弓につがえ、十分引きしぼってそいつの首の骨をひょうふっと射て、船底へまっさかさまに射倒す。平家の方ではしんとして何の音もしない。源氏の方ではまた箙をたたいてどよめいた。「ああ、よく射た」と言う人もいる。また、「情け知らずだ」と言う者もいる。

つまり、『覚一本平家物語』においては、那須与一の勇姿を描くこの場面は、単に、源氏に華々しい成果をあげた武士がいたことを記すためというものではない。

まず、平家が突然、美しい女性に扇をあげさせた理由に

ついては語らせず、源氏側で武士たちが「義経が美しい女性に目がくらんで矢面に立ったところを射殺すという策謀ではないか」と勘ぐらせている。そして、那須与一が見事に扇を射貫いたあと、夕日を浴びて海上に落ちる扇の美しさに感動して矢面に飛び出して舞ってしまう平家の男を、しかも、五〇歳にもなる老人を、那須与一は、「御諚」の一言で、何のためらいもなく射殺している。

この象徴的な場面は、源氏が戦場で一瞬も戦いのことを忘れず、矢面に立つ敵はどのような者であろうと射殺す覚悟と力を持っていること、それが、戦場に女性を立たせ、扇を射させて、その優雅さを愛でる平家との決定的な違いであることを示している。つまり、『覚一本平家物語』においては、那須与一の活躍も、那須与一を賞賛するためだけでなく、源平の戦いに対する意識の違いを示すものとして描いているのである。

では、読み本系の諸本では、どうであろうか。次章では、読み本系の諸本の一つ、『延慶本平家物語』の同じ場面がどう描かれているか、整理していきたいと思う。

第二章　『延慶本平家物語』に描かれる　那須与一像

まず、扇を差し上げた船が現れるのは、膠着状態で今日の戦いはこれまでかと義経が考えた頃ではない。

数剋戦はせけるほどに、平家の軍兵引き退きて、しばしためらひけるところに、

（訳）数時間戦わせた頃に、平家の兵がさがって、しばらく心を鎮めたところで

何故平家は兵を引いたのか、義経が不審に思いつつ、その場が静まりかえる、その時、兵を一人も乗せない船が、渚近くまで漕ぎ寄せて、一丁（＝十段、約一〇九ｍ）あまりの距離で波に揺られ、船の中から二十歳ばかりかと思われる女房が、「皆紅の扇の、月出だしたる」を差し出す。

「是を射よとおぼしくて、源氏の方を招きて」女房が去り、義経は、後藤実基を呼んで、適任者を尋ねる。

此の勢の中には、少し小兵にてこそ候へども、下野国住人那須太郎資宗が子息、那須余一資高こそ候ふらめ。それこそ賭け鳥を三度に二射て取る者にて候へ。父の名「資宗」、余一の名も「資高」と異なるが、余一の

実力を現す「賭け鳥率三分の二」については同様の記述である。「二月の中の十日（＝二月二十日）、余寒なほ激しき上、今朝より北風吹き荒れて、海上静ならず」と日付が変わるが、天候は荒れている。

『覚一本平家物語』の那須与一の祈念は「是を射損ずるものならば、弓切り折り自害して、人に二たび面をむかふべからず。いま一度本国へむかへんとおぼしめさば、この矢はづさせ給ふな」に対し、『延慶本平家物語』の那須余一の、「今一度本国へ迎へさせ給ふべきならば、弓矢に立ちそひ守り候へ。もし此の矢を射はづしぬるものならば、永く本国へ不可返。腹かい切りて此の海に入りて、毒龍の眷属と成るべし」は、傍線を付したように、「矢が当たらなければ、妄念によって毒龍の一味となってやる」との決意が表れている。死んで毒龍になるという発想は、興味深いが、この、祈念についての考察はひとまず別稿に預けるとして、『延慶本平家物語』には扇に向かっての余一の心中がより詳細に描かれる。

さすがに物の射にくきは。夏山の峯、緑の木の間より、ほのかに見ゆる小鳥を殺さで射るこそ大事なれ。

（訳）そうはいっても何が射にくいかなあ。木々の木の葉の繁る夏山の峰で、緑の木の間から、かすかに見える小鳥を殺さないで射るのは大変な事である。

おそらく、これが、実基が言うところの「賭け鳥」の様子なのであろう。余一は、「賭け鳥」よりも「波の上の扇なればたやすかるべし」と考えている。ただ、安徳天皇や建礼門院を始めとする平家の人々、源氏の人々という見物人の多さに晴れがましさを感じているだけである。

そして、いよいよ扇を射落とす。

夕日にかがやきて波の上に落ちければ、秋の嵐に龍田川に紅葉の散りしくかとぞ覚えける。

（訳）扇は夕日に輝いて波の上に落ちたので、そのさまは秋の山風に吹かれて、龍田川に紅葉が散り敷くかと思われる美しさである。

「龍田川の紅葉」といった歌枕等を用いてさらに風雅な様子を強調し、扇に矢が当たってからの『延慶本平家物語』の記述は、さらに深みを増す。平家の船の中から五十余りの武者が現れて舞を舞う。

源氏の方より是を見て、「あれを射よ」と言ひけるに、或は又、「もし射はづいつる物ならば、先に扇を射たりつる事も気味あるまじ。な射そ」と言ふ者もあり。

「ただとく射よ」と言ふ者もあり。余一、「射よ」といふ時には矢をさしはげ、「な射そ」と言ふ折は矢を差し外しけるほどに、「な射そ」と言ふ者は少なく、「ただ射よ」と言ふ者は多かりければ、余一今度は中指を取りて番て、又よつ引いて射たりければ、舞ひける武者の内甲を後へつつと射出たりければ、男はしばしもたまらず、まつ逆に海へがぶと入りにける。その度は船中は苦り、音もせず。源氏の方には「あ、射たり射たり」と言ふ者もあり、又「無情射たり」と言ふ者もあり。

（訳）源氏側は是を見て、「あれを射よ」と言ったが、ある者は又、「もし射外してしまったら、さっき扇を射た事も旨味がないだろう。射るな」と言う者もいる。「ただ早く射よ」と言う者もいる。余一は、「射よ」と誰かが言う時は、矢をつがえ、「射るな」と言う時は矢を外したが、「射るな」という者は少なく、「ただ射よ」と言う者が多かったので、余一は今度は中差しの矢を取って弓につがえ、又、ぐっと引いて射たところ、舞った武者の兜の内側を後へぐさっと射出したので、男はあっという間に真っ逆さまに海へざぶんと入った。その時、平家の船中では苦々しく思い、声もない。源氏の方では、「ああ、射た、射た」と言う者もいる。また、「無情にも射たなあ」と言う者もいる。

『延慶本平家物語』においては、扇を射たあと、感動して舞を舞う男を射るか射ないか、失敗したら扇をいたことが台無しになる、という表現が見られる。つまり、扇を射たあと、男を射ることが、「扇を射たことはまぐれ当たりではなかった」と示すことになっている。射殺したあとに「無情」という表現は出てくるが、それまでは一言も出てこない事から見ても、戦場で矢の届く距離で油断にも舞う男は、殺されても仕方がないという源氏の考えが明らかに示されている。

では、読み本系の諸本の中で、関東よりの情報を多く取り入れた『平家物語』においては、那須与一はどのように描かれているのか、次章では、『源平盛衰記』に描かれる那須与一像を考察したいと思う。

第三章　『源平盛衰記』に描かれる　那須与一像

『源平盛衰記』では、記述の順番が異なっている。語り本系の『覚一本平家物語』においても、読み本系の『延慶本平家物語』においても、奥州から義経に随行してきた佐藤継信が屋島合戦で義経の身代わりに矢で射られて命を落としたあとに、那須与一の活躍が描かれるのだが、『源平盛衰記』では、那須与一の活躍のあとに平家が全力で義経軍を狙い、その結果、佐藤継信が命を落とす。つまり、那須与一が無情にも、感動して舞う平家の男を射落とした結果、平家が怒り、義経への憎らしさを募らせたという描き方である。

さらに、与一が選ばれた場面から、異なる点が見られるので、その相違をまとめていく。

①源平の戦いが膠着した段階で現れた平家の船に乗っていたのは、「建礼門院の后立ちの御時、千人の中より選び出だせる雑司に、玉虫前ともいひ、又は舞前とも申す。今年十九にぞ成りける」という女性である。

②平家が差し上げた扇は、「故高倉院、厳島へ参社あり、神主佐伯景広、この扇を取り出だして、『是は一人の御施入、明神の御秘蔵なり。且うは故院の御情、帝業の御守りたるべし。されば此の扇を持たせ給ひたらば、敵の矢も還て其の身にあたり候ふべし』と祝言して、参らせたりけるを、『是を源氏射はづしたらば、当家軍に勝つべし。射おほせたらば、源氏が得利なるべし』とて、軍の占形に」立てられたものであった。

③源氏方の畠山重忠が、扇が立てられたのは、「義経は女にめづる者と、平家に言ふなるが、かく構へたらば、定めて進み出でて興に入らん処を、よき射手を用意して、真ん中さし当てて射落さんと、たばかり事」だと勘ぐっている。

④与一が選ばれる前に、まず、畠山重忠に「射ることはできるか」と義経は尋ねるが、畠山は「脚気の者なる上に、この間馬にふられて、気分をさし手あばらに覚え侍りき」、つまり、脚気の上に馬上で揺られて手があばれ震えると断る。義経が誰が適任かと尋ねると、畠山は「当時御方には、下野国住人、那須太郎助宗が子に、十郎兄弟こそ」と答える。「助宗」の字は異なるが、実は先に呼ばれるのは、与一ではなく、兄の十郎（為隆）であったとされている。

しかし、為隆が、「一の谷の巌石を落としし時、馬弱くして弓手（＝左手）の臂を沙につかせて侍りしが、灸治も未癒、小振して定の矢つかまつりぬとも不存」として、弟を推薦した。

以上、『覚一本平家物語』や『延慶本平家物語』に描かれない事が多く記されているのは、勝って戻った那須与一の勲功に対して、頼朝が褒賞として五か国を与えたため、一躍英雄になった与一に対して、根掘り葉掘りの調査取材が行われたためであることは想像に難くない。

①の女性の名前などは、明らかにされていると言っても、名前を記すことでことさら真実味を帯びる効果であって、玉虫前という名も舞前という名も本名ではなく、この場限りの登場であるし、扇についても厳島神社の神主から贈られた物で、これによって平家と源氏の浮沈を占ったというのも、他の諸本には見られない。ただ、いきなり与一が選ばれたのではなく、畠山重忠、与一の兄為隆、これらが一の谷の合戦で傷んでいたために選ばれたというのは、非常に現実味のある伝承でるといえるだろう。

このとき与一は「生年十七歳、色白く小鬚生ひ、弓の取り様、馬の乗り貌、優なる男」であったと書かれている。

扇が海に落ちる場面も、

扇は空に上りつつ、しばし中にひらめきて、海へ颯とぞ入りにける。折節夕日に耀きて、波に漂ふ有様は、龍田山の秋の晩、河瀬の紅葉に似たりけり。鳴る矢は抜けて潮にあり、澪浮洲と覚えたり

と、他の諸本よりも情緒深く表現されている上、与一が見事に扇を射落とした際に、玉虫前が、紅の扇が水に漂う面白さに、

時ならぬ花や紅葉を見つるかな
吉野初瀬の麓ならねど

（訳）季節でもないのに、桜や紅葉を見たなあ。ここは、桜で有名な吉野でもなければ、紅葉の美しい初瀬山でもないけれど。

と詠んだとされている。これも優雅な話だが、戦場でいったい誰が女房の和歌を聞き取り、書き留めたというのか、また、源氏側の武士に和歌を理解できる者がいたか、疑問は残る。

そして、問題の、感に堪えず舞を舞う男であるが、これも名前が示されている。平家の侍、伊賀平内左衛門尉の弟、十郎兵衛尉家員である。伊賀平内左衛門尉は平家長と

いって、平知盛の乳母子で、壇の浦まで知盛に同行し、最期は知盛と共に鎧を二襲着込んで、手を組み合って海へ飛び込む有名な人物であるが、その弟については詳細は伝えられていない。したがって、家員が存在したかは不明である。そして、この家員をどう扱うかについては、源氏の中で意見が分かれたように書かれている。

源氏是を見て、種々の評定あり。是をば射べきか、射まじきかと。射よと言ふ人もあり。な射そと言ふ人もあり。是ほどに感ずる者をば、如何無情可射、扇をだにも射る程の弓の上手なれば、まして人をば可弛とはよも思はじなれば、な射そと言ふ人も多し。思ひ思ひの心なれば、口々にとどめきけるを、情は一旦の事ぞ、今一人も敵を取りたらんは大切なりとて、終に射るべきにぞ定めける。

傍線を付した所に注目したい。那須与一が扇のみならず、平家の武将を射たのは、敵を一人でも殺すためだったのである。

そして、射ることが決まったので、一度陸に戻ってきていた与一は、再び海に入り、「今度は征矢を抜き出し、九段ばかりを隔てつつ、よつ引き固めて兵と放つ」。そして、扇の時は七段近くまで海に入って射たが、人間の場合は的が大きいので、九段、一〇〇m以上離れていても射落とすことができたと描く所が現実的であり、かつ、与一の弓矢の腕前の確かさを示している。

そして、この勲功に対して、即座に、「一時が内に、二度の高名ゆゆしければ、判官（＝義経）大に感じて、白総馬に、尾花毛馬なり、黒鞍置いて与一に賜ふ。弓矢取る身の面目を、屋島の浦に極めたり」と記されている。「さめ馬」は、全身が真っ白か象牙色で、肌の色はピンク、目は青い馬であり、尾花毛馬は、尻尾やたてがみが金色の馬である。いわゆるアルビナのようだが、貴重な馬を与一は褒美としていただいている。「二度の高名」つまり、平家に射てみろとばかりに差し出された小さい扇を射落とした高名のみならず、一〇〇m離れた船の上で踊る男を射殺したこともまた、高名だったというわけだ。

ここには、那須与一が扇のみならず、舞いを披露している男を射たことを、「無情」と評価する声もあるにはあったが、戦場で敵の矢面に立つことの危険に気づかない平家の者の油断と、男一人でも機会があれば敵を殺すのが大切と考える源氏の者の心得が明確に記されている。そして、

その声に納得した与一は、迷わず男を射殺したのである。

おわりに

那須与一の人物像が『平家物語』でどのように描かれているかを考察してきた。数多い『平家物語』の諸本は、大きくは、語り本として、聴衆に聞かせることを目的として整えられた諸本と、読み本として伝説や詳細な事情を取材した本とに分けられるが、那須与一の伝説は、語り本系の『覚一本平家物語』においては、「那須与一」の章と「弓ながし」の章の始めの部分を使って、那須与一自身の弓矢の腕前を描くに留まらず、戦場では敵と思われる者はどのような状況であろうが倒せという義経の「御諚」、それを受けて迷わず男を射殺す兵としての心構え・非情さを記すものであった。

一方、読み本系諸本の一つ、『延慶本平家物語』には、与一に、「男も射てしまえ」と声を掛ける源氏の兵たちが多かったことを記すことで、相手が人であろうが、与一の弓射を観たがる兵の「無情」と、囃されて勢いに乗って弓射を成功させる与一の腕前の確かさが描かれている。

また、源氏の情報が多く収集されている『源平盛衰記』は、覚一本同様に、そもそも何故扇は立てられたのか、という点で、源氏側が、「女に魅せられて矢面に立つ義経を射るため」とした上で、まず一番先に与一が選ばれたわけではなく、畠山重忠、与一の兄の那須為隆が調子が万善ではなかったため、若い与一に託されたことを記し、扇を射落とすことが簡単にはできないこと、それを見事成し遂げた与一の実力を示している。そしてまた、射られた扇が夕日に舞い海に落ちる様子に興趣を覚えて舞う平家の男をも、「一人でも敵を取るのが大切だ」と考える源氏の兵の声に、見事に船底へと射倒すのである。

これら読み本系の『平家物語』では、与一の晴れの場での緊張、あるいは、本来選ばれるには若すぎる与一の姿と、与一と共に義経に従軍していた兄ではなく、与一が弓射に選ばれた事情、そしてその与一が見事に扇を射貫いた勇姿を詳しく描いた上で、戦いの最中には一瞬も気を抜いてはならない、機会があれば一人でも多くの敵を殺すのが戦いだという、源氏の兵たちの戦いに対する峻烈さをより詳しく描くものであった。

その意味では、『平家物語』における「那須与一」の人物像は、源平の多くの人々が見守る中、八〇m離れた船の

上の扇を射抜いたのは、その後、一〇〇ｍ離れた船の上で舞う男を射殺した事実と合わせて、まぐれ当たりではない、素晴らしい弓射の腕前を持つ武士であり、かつ、情趣を感じられる場面に、戦場であることを忘れる平家に対して、いつ何時も戦いの中に身を置く緊張を忘れない源氏の兵の一人として、「非情なる武士」を明示する役割を負っているといえるのであろう。

参考文献

・稿中に用いた『平家物語』諸本は、『覚一本平家物語』としては、高木市之助ほか校注『平家物語　下』（日本古典文学大系）（岩波書店　一九六六年）、『延慶本平家物語』としては、北原保雄ほか編『延慶本平家物語　下』（勉誠社　一九九〇）を用いた。
・村井章介編『中世東国武家文書の研究』（高志書院、二〇〇八年）
・大野進一著『那須与一』（新人物往来社　一九八九年）
・菱沼一憲著『源義経の合戦と戦略　その伝承と虚像』（角川選書　二〇〇五年）

（本学日本語日本文学科教授）